



凡女
3655

潮来図誌

二卷 藏

藏



以てその名にちて居る所は其の形も是れ和名秋人の花
に云く其の根南都海法園の五言經句の所也俳
句に云く潮来なる遊女と云ふは友をよこさるゝを
其の地あるべし但潮の音ありて年々もいへる也
其の初を承け採りて遠地傳播し侍る意也魏園
播名正徳徳と云ふ所也其の漢名土人二峰
園誌之是れ其の形也其の形は土人二峰

たゞ其用心も多動く事あり。但其の意も亦此
今學を詳はして其意を果大依裁を初め盡す所
然るも其意の呼吸を法と起し、初めの稽古を
於脚の二峰を初め、其意の意之人の二峰の
諸海をどう見ゆと云ふ、其意あり。

己亥仲秋

心人 道中 杜溪



五月の如く

海軍の如く

己亥

心人



光陰あり湖東の宮を東都五所衛と云ふ
歴あり船夕のお船入少松若山送客の世世
花のついでた雪のゆふゆ十六夜くきいあま
さくさくり香取切は息柵さししの浦く
まきも一もりふりり子室十光夜のあま
西南こつりあり程十まであまの影境あり
色き比まき海子口より親舟をきまきん
入津ありまきや諸君の花をまきつ
し、瀬川くきく船をいり唯仙彦
のこも存れまた西の入子瀬谷里や
ゆふ坂ありくきく不のさし引く死
たき岩つりくきく爰より遊女町も
十余町まきるも浅る下まきくやたのき

並本ありいりかこのまきく松と神島舟
の目りそり赤林とや春を梅屋の名木四葉
まきる光いとよきくはまきよりまきく
信田の浮しはまきくやまきく

興島と崇法寺のはり観蓮の
まきくまきくまきく

鏡子半次天皇を五所目の裏のまきく
まきくまきくはまきく文治元年一月七日磯山原ま
まきくまきく浪送の浦にまきくする折
まきくまきく花のまきく金神の綱まきく光
まきくまきくあま余りのまきく儀まきく
まきくまきく先切りまきくまきくまきく
まきくまきくまきくまきく田畠実のまきく

神徳のいさしきもさきより公許今の侍
社に近し一侍宮を造りてある年六月廿日
を祭りてのしとあり因以日深き侍白甲の
をもちてさきより侍衣をもちてさきより
上ニ神樂をたたく侍殿ありてさきより
さきより侍所をたたく侍殿ありてさきより
風防の神子とさきより侍殿のおそ相授
ありてあり

文治元年より天保十一年まで
凡六百五十九年あり

海愛山長持禪二十町目より入る場のまじり
松のあか木まで山門は十六層深きことあり

神殿は南向十町四面のうらやあり 右大板
殿の建立なり此此たたとに外流松前
文治梅ありて侍は屋瓦一学の速
こころ侍連人の為殿ありてさきより侍物系殿
ふつくしうらや 右侍の記さきより紙は
かき山頂に 西山云の侍高の所とあり
梅龍山に入寺一向宗と云録十年晋院
延方村に侍ありてさきより侍六享保十
八年建立
徳大山と云侍法華宗元禄十二年再興
大永山侍國侍侍宗元禄元年再興
年より八丈坊八元録元年建立
亦侍者八丈の寺あり元禄元年八丈板木

ありきまのこえのこほやんありき
君の廟よりと出きまきとあり

常陸國海雲山長勝禪寺鐘銘 有序

寺始於天治元年右大將殿時所立也
迨今元德庚午百二十餘載乃為鎌倉
殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未
宏与貴春等共施財新而大之住持妙

高長老請於圓覺清拙叟為之銘曰

惟古蘭若 長勝殿名 寸庭微撞

今器未宏 爰命鳥氏 鎔範速成

鏗々訇々 殷雷吼鯨 音聞佛事

開壘啓音 大哉圓通 十虛廓清

霜天月曉 落景初更 真機普發

衆葉齊驚 深禪偃仰 苦趣休停

容舩夜泊 常陸蘇城 上延睿筭

下息^ノ武^ノ兵^ノ 檀門茂盛 梵刹堅貞

海雲日横^リ 青山淨嶽^多 人天號令

相道通亨 元德庚午十月一日書

大工甲斐權守助光

住持傳法沙門妙節

大施主下総五郎禪門道暁

大檀那相模禪定門崇濫

元徳より天保十三年己卯六月十餘あり

新志... 義の... 山... 楓... 尺下... 二月... 小里... 大里... 左跡... 観宮... とも... 左... 尺... 下...

大里... 左跡... 観宮... とも... 左... 尺... 下...

名物

白あや先
印ふふ

川名ひ

鯉

潮來竹杖詞

詩佛老人

思似月明復水清行處逐郎行

誠從十二橋頭望何水可橋每月明

鷗喚

地稱潮來湖稱霞負山臨水幾人家

不知紅蓼黃蘆岸別有長春一架花

雲山居士

霜落梳蒲淺水清碧琉璃上蓋船行

外湖忽入裏湖去十二橋々蓋月明

片江漁居

霞浦東南十六鄉槐田熟得水中央

新玩賣却登樓客喚做一籃香米節

泊碧欄舍鴨齋老人

家々面水領秋色明月湧時流更輝

漁唱一聲何處子潮來風起竹枝辭

万葉集

為清あは波逆のこみの玉成深了舟

堀川書

しけもたぐまれゆき々終芝

あつあつあきかの海よ志月まそく

あけのささよまきりあきま

顯仲

音まゝのきき 若のわづらひ 挿のまき
春のやさうらぎ せんせく 柳のよめ

井口庵橋上

宿のや 隣り 昔の 吹く 白
うんとも 一好く 吹く 雪蔭の白

十六の雪鴨を

茶のむや 美のけし 鳴れ 鶉乃 聲
秋の 暮る 柳の 一
岸の 暮の さら 木 あり すすき
枯あ ー や ぬま 色 ー 月 の あー
三 路 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
江 の う け を ち め ー ー ー ー ー ー ー ー
田 舟 あり ー ー や ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

士朗 一茶

素樸 護物

梅室 貞良

徐全 月海

山馬 魯見

汝水

を 津 年の あ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
を ぬ くの の と ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
賞 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
今日 是 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
こ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
月 是 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
鐘 は あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
飛 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
こ の あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
稻 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
お あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
乃 あり ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

音人

牛乳

如是

仁里

英柳

鳳尾

蒲焉

島里 鳳後 松什

指ささし七山の各をとりおそろふ
病とて幸すけり切りきく角に柳はよき
二三日ありてとて山や とうふの上
かたまたまのついでに 社名
巧く青きやあつりていふ山に
浪のまじく楠はかたし 柳はうふ
輝とてえくめや先門ありかま
露けりや雲の中はあはれや
花はあはれいしきとてさよふさ
きりくす月の濠子に雲けり
そとくきすみおくれくとて柳は
一ふく柳はあつりていふ山に
柳はあはれやあはれはよりか
りて

桃南 竹與 一兆 幻外 幻外 汶里 知水 竹亭 央江 江月 雲山 抱儀

暹吉湾のあはれいふわあろ
ふいとさし雲中のみさわさう
ふのいふもさも耕地や稻のま
まてうふ耳をとあはれいふ
茶袋は入てさけりぬこ
たまつては舟は人のあはれ
二枚えいふていふ山に
草のあはれあつりていふ山に
あつりていふ山に
柳の花やあはれいふ山に
唯あつりていふ山に
島先こつりていふ山に

静賢 吳江 雄齋 東明 駒鳥 松塘 社翁 比古 吟齋 青岐 糸女 茨乳

潮来八景

天王山秋目

柏木の

木の

朝比目

真



子秋

長勝寺晚鐘

澄の音や

結了中

七の

秋名音

稻高山

晴光

登日中

狐の

喜冠



孤米

淡所暮雪

雪あり

持ててや夕の

淡所下 落

一季ふし

出汐

竹乃

志

名

名

園部山帰帆

涼

あゆ

帰る

風五



湖浪里坂

夕照

松

や

名

名

名

十二橋夜雨

き

の

二

樹せよららるる高の友すらん
あまのこゝろ多きと云の掛秋
届くんと川の時 船と見ん

松江

桃青

ソウ

真享、印仲秋未五日

向の上も高き月もさう契う柳

曾良

滴来竹枝

管の音 知つて

掃苔の影を

大板老人





爰の
あつとつ噴あつくりり
くすせりりり

其唄

柳より直あ。柳のつるも風もあひら
きみきききの日月まはちよあまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるる
いたこちまの十二のえーをりりりりり
恋こいれをかくせみよりりりりりりり
いとこちまのまきもの中りりりりりり
あつとつ噴あつくりりりりりりりりり

あつとつ噴あつくりりりりりりりりり
秋色柳のりあえりりりりりりりり
あつとつ噴あつくりりりりりりりりり
此舟子をして見あるる名物四條古亭
名家お記色林廊中色色色色
あつとつ噴あつくりりりりりりりりり
あつとつ噴あつくりりりりりりりりり

之何 其子 入る 何れ
 之 其 入る 何れ
 何れ 其 入る 何れ
 何れ 其 入る 何れ
 何れ 其 入る 何れ

喜屋山人


